

中田喜直の歌曲集『こどものための8つのうた』 における音楽的特質

薩摩林淑子 (児童学科・講師)

The Characteristics of Yoshinao NAKADA's Song Album "8 SONGS FOR CHILDREN"

SATSUMABAYASHI Sumiko

In this paper, I discuss the characteristics of Yoshinao NAKADA's song album "8 SONGS FOR CHILDREN". I examine the relationship between the poems for children and music, and analyze the piano-parts focusing on his writing style. I point out a variety of writing styles, which represents 'a world of children'. About piano-parts, I point out the details of his writing style; e.g. the use of scales, intervals, accords, and sounds in the coda. "8 SONGS", represents 'children's feelings, life', are song album for adults and have a variety of sounds and fantastic sounds.

Keywords: Yoshinao NAKADA Song album "8 SONGS FOR CHILDREN" Children's song Piano-part
キーワード：中田喜直 芸術歌曲集『こどものための8つのうた』 童謡 ピアノパート

序

中田喜直 (1923-2000) の作品は、童謡、芸術歌曲、合唱曲など声楽曲が圧倒的に多いことが特色である。そのうち芸術歌曲は、生涯に約152曲が書かれている。それらは、テキストの選択、作風ともにヴァリエティに富んでいるが、その中に「抒情的」な作風を持つと評される作品が多くみられる。例えば初期作品として、三好達治の詩に付曲した歌曲集「海四章」、小品「すずしきうなじ」⁽¹⁾、中期の歌曲集「木の匙」、歌曲集「愛を告げる雅歌」など、いずれも抒情的な面を有した中田の代表作とされている。一方、それら「抒情的」な作品とは作風が異なる作品群として、詩「童謡」をテキストに用いた芸術歌曲集がある。歌曲集

『六つの子供の歌』(1947年) (以下、『六つ』)、歌曲集『こどものための8つのうた』(1958年) (以下、『8つのうた』)、歌曲集『ほしとたんぽぽ』(1989～1991年) (以下、『ほし』) の3曲集全28曲がそれに該当する。『六つ』は、作曲当初から音楽書法の新鮮さが高く評価された⁽²⁾と同時に、中田が「私の本当の代表作」⁽³⁾と自負しており、『8つのうた』は『六つ』から約10年後に書かれ、『ほし』は「六十歳を過ぎてからの代表作」⁽⁴⁾と自負した、いずれも重要な作品である。中田は童謡を1000曲以上も書いているが、芸術歌曲においても、童謡を意識した作品を意欲的に書いていることから、中田の童謡に対する並々ならぬ思い入れの深さが伺える。これらの作品には、子供の

表1『こどものための8つのうた』詩の内容と楽曲構成要素

	タイトル	詩人	詩の「情感」	詩の「時間の流れ」		調性	曲頭発想記号
				キーワード	※①② 時間		
1	くるみのお家	志甫 昌治	ファンタジック	「青い月夜」	夜	D:	かわいらしく
2	ねえ 蜂さん	志甫 昌治	動物への親しみ	—	—	D:	あっさり
3	雨ふり	清水 たみ子	ゆううつ	雨をながめている子ども	朝～昼間	d:→c:	Moderato
4	うれしい象さん	安藤 伸之介	ユーモラス 動物への親しみ	「象さん/朝から/わらってる」 「夕日」「毎朝」「つくつくぼうし」 「おうちへ帰れば/おうちの匂い」	朝～昼間	無調	ユーモラスに少し重い感じを出して
5	匂いのある歌	サトウ・ハチロー	日常 母さんへの思慕	「夕日」「毎朝」「つくつくぼうし」 「おうちへ帰れば/おうちの匂い」	朝～昼間～夕方	無調 → fis:	Allegretto/活発に
6	むこうのきしへ	宮内 徳一	動物への親しみ	—	—	Fis:	さらっと
7	かあさんはやくし	高橋 俊雄	母さんへの思慕 不安	「タヤけ雲も きえちやった」	夕方～夜	G:→A:→a:	気持ちをこめて、語るように
8	おやすみなさい	中井 昌子	安らか 希望	「おやすみなさい」「またあした」	夜	F:	静かに

※①「」内は詩の言葉。

※② 2・6曲目は特定できるキーワードなし。

世界の情景・ファンタジーが多様な音楽書法で表現されており、独自の作風を醸し出している。中田は、童謡を子供だけのものと捉えることなく、大人が味わえる「童謡の世界」を表現した音楽を、芸術歌曲において試みたと考えられる。そこで、「童謡」をテキストに用いた歌曲集で、さらに中田がつながりを示唆した前掲3歌曲集を取り上げ、中田が「童謡」に描かれた子供の世界をどのように捉え、芸術歌曲としていかなる音楽書法を用い、どのような音楽的特質を持つ作品に仕上げたのかを探究することにした。

筆者は前稿^④において、3歌曲集の楽曲構成要素の比較検討を行い、それをふまえ『ほし』における音楽的特質とその要因となる音楽書法について考察した。その際に、『8つのうた』における楽曲構成要素の特徴として、①ヴォイスパートに日本的な音階・音組織と西洋音階の両方が用いられる、②臨時記号が多用され、調性感があいまいで幻想的な響きを有する、という2点を指摘した。本稿では『8つのうた』に焦点をあて、②の点が具体的にはどのような音楽書法から生じているのかをピアノパートの楽曲分析を通して明らかにするとともに、中田が「童謡」をどのように捉えて表現したのか、詩「童謡」と音楽との関わりを考察し、以上の分析を通して『8つのうた』の音楽的特質を探究する。

1 楽曲分析

1. 分析方法

(1) 曲集全体の概要について、詩「童謡」の内容

と音楽との関わりから考察する。

(2) 各曲ごとに、①詩の構成と音楽との関わりを考察し、②ピアノパートの響きの特徴を分析する。②の分析方法は、まずピアノパートを小フレーズに区切り、小フレーズ内の構成音をすべて抽出する。次にその構成音が属する音組織を時系列的に列挙し、特徴を考察する。

2. 楽曲分析結果

(1) 曲集全体の概要：詩「童謡」の内容と音楽との関わり（表1）

『8つのうた』のテキストである「童謡」の内容には、動植物、子供の生活・心情、子守歌、童話・ファンタジーが取り上げられている。1.「くるみのお家」は、青い月夜に何者かが「胡桃のお家」を訪ねるという童話であるが、この話の主人公、季節、双生児の赤ちゃん、小さな声の主の正体などがはっきり分からないところが曖昧でファンタジックである。2.「ねえ蜂さん」では「蜂」と「牡丹の花」が登場する。蜜を飲みたい蜂に、何者かが「牡丹の花がひらくまでしばらくおまち」と優しく語りかける。3.「雨ふり」は、雨の日の子供の心情が描かれる。「あめやまないかなあ」と繰り返しつつぶやきながら、晴れていたら一緒に遊ぶはずであった友達に思いを馳せている。4.「うれしい象さん」は、象が「ウフフフ」と笑うという、子供の想像・空想の世界である。5.「匂いのある歌」は、子供の身の回りの自然、家、お母さんの「匂い」が言葉で表現されている。6.「むこうのきしへ」は、「ちいさなちょうちょうさん」

が「むこうのきし」へ飛んでいく様子を温かく見守る情景で、小動物への親愛の情にあふれた内容である。7.「かあさんはやくこい」は、夕方、母親の帰宅を待ち望む子供の心情である。8.「おやすみなさい」は、翌朝のすがすがしい風景を想像して眠りにつく、希望に満ちた「子守歌」である。以上8篇の詩には、子供の持つあらゆる心情・情感が含まれている。詩の内容からは、表1に示したような「時間」を読み取ることができ、中田が8篇の詩を「時間の流れ」をもとに配列して音楽を付けたことが分かる。

音楽には次のような流れがある。(以下、《 》は曲頭発想記号、()は筆者の考察した詩の情感。) 1.「くるみのお家」は二長調で《かわいらしく》始まり、2.「ねえ蜂さん」も同じ二長調で《あっさり》と、3.「雨ふり」(ゆううつ)は同主調の二短調で、悲しげな響きへと変化し、さらに長2度下のハ短調へ転調し一層暗い響きになる。4.「うれしい象さん」《ユーモラス》、5.「匂いのある歌」は無調を用い、「匂い」の途中で無調から嬰へ短調へ転調し、調性感が戻る。6.「むこうのきしへ」は同主調の嬰へ長調で始まり、嬰記号6つを用いる明るくきらびやかな響きに変わる。7.「かあさんはやくこい」の冒頭は、短2度上のト長調で始まる。曲中、長2度上のイ長調へ転調し、響きが一層明るくなるが、直後に同主調のイ短調へ転調し、一気に短調の持つ悲しい響きへ落ちる(不安)。8.「おやすみなさい」(安らか・希望)はへ長調で、変記号による穏やかで優しい曲調となる。以上、全体の流れとしては、同主調への移行を効果的に用いて、調性の持つ「明暗」の対照性がみられる。

(2) 各曲ごとの楽曲分析

楽曲分析結果を、各曲ごとの「分析表」にまとめて、詩とともに掲載する。尚、表中の「前」は前奏、「後」は後奏、「間」は間奏、①、②…は詩行、「Vp」はヴォイスパート、「Pp」はピアノパートを示し、調性は、長調(Dur)を大文字、短調(moll)を小文字で示す。

第1曲「くるみのお家」(分析表1)

①詩の構成と音楽との関わり

12行5節構成の口語定型詩で、二つの場面からなる童話である。シラブルは、八五調(①行目のみ七五調)で統一されリズムカルである。音楽はこれに即し通作歌曲形式をとる。詩の前半(A:①~④)は、何者かがくるみのお家を訪ねるまでを描いており、後半(B⑤~⑫)はそこでの行動・やりとりが描かれる。音楽は、後半(B)から全音階の響きを用い、不可思議な童話の内容・雰囲気表現している。後半第5節(⑨~⑫)の台詞『双生児の赤ちゃん/寝てるから/春まで訪ねちゃ/いけません』のヴォイスパートにはpp・「軽快に」が付され、ピアノパートは、左手が四分音符スタッカート、右手が八分音符(高音域)の後打ちリズムで軽やかであり、かわいらしく「ないしょ話」をしているような雰囲気を表現している。

(分析表1)

内容	A				B			
詩節	1	2	3	4	5			
行	前①	②間	③	④間	⑤⑥	⑦⑧間	⑨⑩	⑪⑫後
音	D: 変化音				全音階			
楽	ピアノ組織				ダイナミクス(Vp)			
	mp				pp pp			
	(Pp) mp p				pp pp pp			

B				A			
⑤ 双生児の赤ちゃん	⑥ 寝てるから	⑦ 春まで訪ねちゃ	⑧ いけません	⑨ くるみのお家	⑩ 青い月夜に	⑪ こっそりと	⑫ 訪ねたが
⑤ うしろで 小さな 声がする	⑥ だあれもお話 してくれず	⑦ こごとたてて 呼んだけど	⑧ しっかり縛まって おりました	⑨ 双生児のお家 のようい事は	⑩ 訪ねたが	⑪ こっそりと	⑫ 訪ねたが
五 八 五 八	八 五 八 五	八 五 八 五	八 五 八 五	八 五 八 五	八 五 八 五	七 五	シラブル

(譜例1)「くるみのお家」 後奏



②響きの特徴

詩の③行目までは二調長音階、④行目から曲の

最後まで全音音階を用い、響きの変化で、詩の場面の变化を表している。ダイナミクスはmp～ppで弱音記号が目立ち、静寂が意識された響きである。後奏の32分音符の8連符上行形（譜例1）により、軽やかにふわっと浮かび上がる響きが生じている。

第2曲「ねえ 蜂さん」（分析表2）

①詩の構成と音楽との関わり

15行3節構成の口語定型詩で、各節のシラブルが統一（五・八五・七五調）される。詩の前半A（①～⑩）は、主人公「蜂さん」が花の蜜を吸うことを優しく制し、後半B（⑪～⑮）では「ひらいたら/ゆっくりおのみ」と語りかける。音楽は、Aを有節歌曲形式、BをAの変奏有節歌曲形式としている。

(分析表2)

内容	A										B				
詩節	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10										11 12 13 14 15 後				
行	前 ① ② ③ ④ ⑤ 間 ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩										⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮				
音	D: 半音										D: 半音				
楽	D: 半音										D: 半音				

ねえ 蜂さん	① ねえ 蜂さん	② さわちゃ いけない	③ いまひらく	④ 牡丹の花よ	⑤ かわいそう	⑥ ねえ 蜂さん	⑦ しやしち いけない	⑧ もうひらく	⑨ 牡丹の花よ	⑩ はなれて	⑪ ひらいたら	⑫ ゆっくり	⑬ おのみ	⑭ おまちょ	⑮ ねえ 蜂さん
シラブル	五	七	五	八	五	五	七	五	八	五	五	七	五	八	五

(譜例2) 「ねえ 蜂さん」 下降する半音



②響きの特徴

主にニ調長音階が用いられるが、詩の各節4行目（④、⑨、⑭）において、下降する半音（譜例2）を用いて響きに変化を付けるとともに、ダイナミクスを付して（譜例2）半音の響きを強調している。後奏は属和音（半終止）で終止感を弱めることにより、まだ話が続いていくような余韻が生じている。

第3曲「雨ふり」（分析表3）

①詩の構成と音楽との関わり

11行5節構成の口語自由詩。詩の前半A（1、2節）は、晴れていたらママと行くはずであった動物園の様子を空想し、後半B（3、4節）は友達を思い浮かべ、5節で詩の主題「あめ あめ やまないかなあ」を繰り返す。詩の主題「あめ あめ やまないかなあ」は詩中3回登場（①、⑥、⑪行目）し、3回目（⑪行目）の「あめ・・・」で音楽はニ短調からハ短調へ転調し、ヴォイスパートメロディはD音からEs音へ半音上がり（移調）、雨が止むことを切望する子供の気持ちの高揚を表現している。

(分析表3)

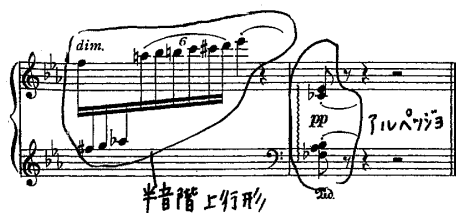
内容	A		B							
詩節	1	2	3	4	5	後				
行	前①②	③④⑤	間⑥	⑦	⑧⑨	⑩	⑪	後		
音	全音		全音(変)		全音		全音(変)		全音 半音	
調性	d:		下降				上行		c:	

A'	B	A	雨ふり
① あめ あめ やまないかなあ	⑥ やつちゃんも ひろちゃんも	⑪ あめ あめ やまないかなあ	① あめ あめ やまないかなあ
② ママと行くつもりだったのに	⑦ おうちにいるの あきしかった	⑫ おおききでんしゃ おやすみだつて	② ママと行くつもりだったのに
③ どうぶつえんは あめふりで	⑧ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑬ おおききでんしゃ おやすみだつて	③ どうぶつえんは あめふりで
④ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑨ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑭ おおききでんしゃ おやすみだつて	④ おおききでんしゃ おやすみだつて
⑤ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑩ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑮ おおききでんしゃ おやすみだつて	⑤ おおききでんしゃ おやすみだつて

(譜例3) 「雨ふり」 全音音階構成音



(譜例4)「雨ふり」 後奏



②響きの特徴

後奏の直前までは全音音階が用いられる。変化音を含んだものも用いられ変化に富む。この全音音階構成音は曲の進行につれ下降（譜例3）し、その響きに絶えず繊細な変化が生じている。後奏で半音階上行形が用いられ（譜例4）、ここにおいて全音から半音へ、下降から上行へと音の響き方が変化する。さらに、後奏の半音階上行形に続くアルペッジョが *pp* で奏され、上方へ浮かんで消え入るかのような音空間を形成している（譜例4）。

第4曲「うれしい象さん」（分析表4）

①詩の構成と音楽との関わり

18行3節構成の口語定型詩。各節のシラブルは統一（五五・七五・七五調）される。詩は、象が笑うという子供の想像力あふれるファンタジーで、前半A（1・2節）は「ウフフフ」と笑う象を共感の気持ちで見つめる。後半B（3節）は不思議に思う気持ち・素朴な疑問が⑮⑯「なにがそんなに／うれしいか」と語られ、音楽は⑮の直前に半音を用いた間奏を挿入し、その不可思議さを響きで表現している。

(分析表4)

詩	A		B					
	1	2	3	間	15	16	17	18
節	前	①②	③④⑤⑥	⑦⑧	⑨⑩⑪⑫	⑬⑭	⑮⑯	⑰⑱
行	前	①②	③④⑤⑥	⑦⑧	⑨⑩⑪⑫	⑬⑭	⑮⑯	⑰⑱
音	ピアノ音組織	音程	五音音階	音程	五音音階（変化音）	音程	半音	五音音階
楽	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）	（長2度・増4度）

B					A				
⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ	わらわ
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
象	象	象	象	象	象	象	象	象	象
さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん	さん
朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝
から	から	から	から	から	から	から	から	から	から
⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
い	い	い	い	い	い	い	い	い	い
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
に	に	に	に	に	に	に	に	に	に
⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
に	に	に	に	に	に	に	に	に	に
⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
い	い	い	い	い	い	い	い	い	い
シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル	シラブル

(譜例5)「うれしい象さん」 増4度



②響きの特徴

詩の主題「ウフフフ」（①②、⑦⑧、⑬⑭）に付した増4度音程（譜例5）が曲を特徴付け、ユーモラスかつスケルツァンドな曲調となっている。また、5度内の狭い音程の響きが終止多用されることが特徴で、「ウフフフ」には、増4度のほか長2度音程が、③～⑥、⑨～⑫、⑮～⑱行目には、5度音程（完全5度、減5度）、4度音程の響きが用いられる。全体的に響きがシンプルな曲調となっている。

第5曲「匂いのある歌」（分析表5）

①詩の構成と音楽との関わり

16行4節構成の口語定型詩。各節のシラブルは八七調で統一され、さらに各節2・4行目は「匂い」で韻をふみリズムカルである。前半A（1・2節）では、戸外の自然物（みの虫、枯れ枝、小笹の新芽、まっかなトンボ）が描かれ、後半B（3・4節）では、室内の中（おなべ、おみそ、おうち、かあさん）が描かれる。音楽は、前半は音組織が頻繁に変化し、外を眺める子供の視点がめまぐるしく変化するようである。後半Bで転調（無調→嬰へ短調）し、戸外から室内への視点の変化が表現される。後半は、音組織が一定し室内の落ちついた雰囲気を表す。「つくつくほうし」の鳴き声が、長2度を含むピアノパートで擬音として表現される（譜例6）。

(分析表 5)

詩	A				B			
	1	2	3	4	5	6	7	8
節	前	①②③	④	間	⑤	⑥	⑦⑧	間⑨⑩⑪⑫間⑬⑭⑮⑯後
音	ピアノ音組織 五音音階 全音 9和音				a: D: h: fis: (二六抜き、六抜き、二抜き)			
楽	調性 無調				fis:			

詩	B				A			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
節	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
音	ピアノ音組織 五音音階 全音 9和音				a: D: h: fis: (二六抜き、六抜き、二抜き)			
楽	調性 無調				fis:			

(譜例 6) 「匂いのある歌」

長 2 度を用いた擬音 (つくつくほうし)



②響きの特徴

音組織が頻繁に変化する点が特徴的で、前半A (1・2 節、無調) は、五音音階→全音音階→9 の和音→イ調短音階→ニ調長音階→ロ調短音階、後半B (第3・4 節、嬰へ短調) は、嬰へ調短音階 (二六抜き、六抜き、二抜き) のような流れである。日本的な音組織 (五音音階、短音階二六抜き等) が、曲全体の響きを形成している。

第6曲「むこうのきしへ」(分析表 6)

①詩の構成と音楽との関わり

18行3節構成の口語定型詩。前半A (1・2 節) では「ちょうちょさん」への暖かい眼差しが、後

(分析表 6)

詩	A				B			
	1	2	3	4	5	6	7	8
節	前	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
音	ピアノ音組織 Fis: gis: Fis: 五音音階				Fis:			
楽	調性 無調				Fis:			

詩	B				A			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
節	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
音	ピアノ音組織 Fis: gis: Fis: 五音音階				Fis:			
楽	調性 無調				Fis:			

半B (3 節) では「かぜさん」へのお願いが綴られる。音楽は有節形式で、1~3 節とも共通である。

②響きの特徴

嬰へ調長音階を主に用いているが、詩の各節2 行目 (②、⑧、⑭行目) に嬰ト調短音階を、4 行目 (④、⑩、⑯行目) に五音音階の音組織を用いて、変化をつけている。ダイナミクスは主に p、mp が用いられ、優しく可愛らしい詩の内容を表現している。

第7曲「かあさんはやくこい」(分析表 7)

①詩の構成と音楽との関わり

12行3節構成の口語定型詩。詩のA (1 節) では、母の帰りを待ち望む子供が「おそいなあ」とつぶやき、B (2 節)、C (3 節) では、「はやくこい」「とんでこい」と気持ちが高ぶっていく。音楽は変奏有節歌曲形式をとり、調性は、A・B がト長調、C (⑨行目「空に字をかきました」) でイ長調 (長2度上) に転調し、それに伴い、ヴォイスパート・ピアノパートのメロディが長2度上がる。これにより子供の気持ちの高揚が表現される。続く⑪行目「かあさんとんでこい」で同主短調へ転調 (イ長調→イ短調) し、まだ帰らない母を待ち焦がれ不安に襲われる子供の心情を表現している。

(分析表 7)

詩	A				B				C			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
節	前	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
音	ピアノ音組織 G: 減7 全音音階 音程 II (増8度・減8度)				a: 全音音階				A: a: 半音 II (2度)			
楽	調性 G:				A:				a:			

詩	C				B				A			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
節	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
音	ピアノ音組織 Fis: gis: Fis: 五音音階				Fis:				Fis:			
楽	調性 無調				Fis:				Fis:			

②響きの特徴

まず、2 回の転調による響きの変化がみられ、1 回目の転調 (⑨行目、ト長調→イ長調) は長2

度上への転調で明るい響きとなり、2回目の転調（⑪行目、イ長調→イ短調）は同主調への転調で、一変物悲しい響きに変わる。次に、同一内容の詩行に、異なる音組織を用いる響きの変化がみられる。①、⑤、⑨行目「空に字をかきました」に、①ト調長音階、⑤イ調短音階、⑨イ調長音階を用い、表情を変えている。

後奏には、半音進行上行形、長2度+長2度和音がみられ、2度音程の響きが明確に鳴っている。

第8曲「おやすみなさい」（分析表8）

①詩の構成と音楽との関わり

1節9行構成の口語自由詩で、七五調（④⑤行目のみ八五調）で統一される。詩は、「おやすみ

なさい」（①、⑦行目・・・A）と、「～するまで」（②③、④⑤、⑥、⑨行目・・・B）と、「またあした」（⑧行目・・・C）から成り、【A,B,B,B】-【A,C,B】のように大きく2部分に捉えられ、音楽は①、④、⑦行目に主和音（I）を配置し4部分に分けている。④、⑤行目「すずめがおしゃべり／し出すまで」の直後のピアノパートのトリル（長2度、高音域）は、すずめの鳴き声の擬音と考えられる。

②響きの特徴

伴奏音型で分散和音上行型が常に鳴っている。その和声進行には、7の和音、付加6の和音が多用される。⑤行目に半音下降形を用いることで、伴奏音型に上行・下降の明確なコントラストが生

（分析表8）

詩	内容	A B		B B		ACB	
		1		2		3	
音楽	ピアノ音組織	前		④⑤⑥		⑦⑧⑨	
		F: I, VI, II, VII		I, II, V		I, VI, V, II	
				長2度 半音		コーダ 後	

ピアノ音組織：詩行ごとの和声進行の詳細

前 I → I ₇ → I + ₆	④ I ₇ → I + ₆	⑦ I → I ₇ → I + ₆	コーダ I → I ₇ → I + ₆ II ₇ VII → III
① I → I + ₆	⑤ I → II + ₆	⑧ VI → V ₇	V ₇ - ₆ V ₇ - ₆ I ₇ → I + ₆ I
② VI ₇ → I + ₆	⑥ II ₆ → II ₇ - ₆ II ₇ → V ₇	⑨ II ₇ - ₆ II ₇ → V + ₆ V ₇	後 I ₇ → I
③ II ₇ → II → VII ₇ → VI ₉			

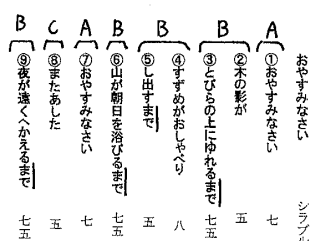


表2『こどものための8つのうた』ピアノパート後奏の音組織

作品名	ピアノパート後奏(終止音組織)
1 くるみのお家	全音音階上行形(32分音符の8連符)
2 ねえ 蜂さん	属和音(V)
3 雨ふり	半音階上行形→五音音階(変化音含む)の上行アルペッジョ
4 うれしい象さん	増4度音程
5 匂いのある歌	主和音(I)の変化和音
6 むこうのきしへ	主和音(I)
7 かあさんはやくこい	変化和音(a: II ₇) + 半音進行上行形→長2度+長2度和音
8 おやすみなさい	主和音(I)

じている。

II 考察

『8つのうた』の各曲は、各々独自の音楽書法を用いながら詩「童謡」の内容を表現していたが、ピアノパートの響かせ方に関して3点の傾向が見出された。

第1に、響きの変化の付け方として、1曲の中で長音階・短音階、半音階、全音音階の音組織を併用する点である。この点はヴォイスパートにおいても同様であるが、特にピアノパートにおいては、半音階、全音音階は変化音を用い変化、発展させた形で取り入れるものも多い。これらの併用により、機能的和声的な調性（長調、短調）の響きの枠組みを超えた、幅広い音空間が生じていた。第2に、日本的な音組織⁶⁾を中心にした曲の存在である。「うれしい象さん」、「匂いのある歌」は五音音階を明確に用いた無調作品で、その響きからは日本のわらべうたに通じる情緒が生じている。第3に、ピアノパート後奏における響きである（表2）。明確な終止形（主和音）で終止する2曲を除き、連符、アルペッジョ、2度・4度音程などの音組織が用いられ、さらにダイナミクスは弱音記号（*p・pp*）が多用され、以上の書法により、ふわっと浮遊しているような柔らかな響き、ファンタジックで自由な雰囲気・余韻が生じている。

次に、詩と音楽との関わりにおける共通した傾向として、転調による響きの変化を子供の心情の変化と対応させていた。「雨ふり」では子供の気持ちの高まりを、二短調→ハ短調（長2度下）への転調でメロディを短2度上げて、「かあさんはやくこい」ではト長調→イ長調（長2度上）の転調でメロディを長2度上げて表現し、イ長調→イ短調（同主調）への転調で子供の苛立ち・不安感を表現していた。すべて近親調における転調で、音楽の流れがスムーズで無理がないことも特徴といえる。また「匂いのある歌」では、一詩行ごとにピアノパートの響き（音組織）を変化させることで、子供の視点の変化を表現していると考えられた。

結び：『8つのうた』の音楽的特質

『8つのうた』のテキストは子供のために書かれた詩「童謡」であるが、音楽は専門の大人の演奏家により歌われることを意図した芸術歌曲であり⁷⁾、子供が楽しんで歌えるような「簡単さ」、「実用性」を意図してはいない。しかしその音楽は、詩と音楽の関わりから考察されたように、テキスト「童謡」に表現された子供の心情に密接に寄り添っていた。さらに音楽は、ピアノパートの多様な音組織の併用や、使用音組織を詩行ごとに頻繁に変化・発展させる書法により、1曲内で鳴り響く音空間を豊かにし、後奏の終止音の用い方・響かせ方により「ファンタジック」な雰囲気にとりあげていた。これらのことから中田は、「童謡」に描かれた子供の心情や生活を、想像力豊かな空想的でファンタジックなものと捉えて、一定の調性の枠にとらわれない変化に富んだ音の響きで表現したといえよう。

中田は「童謡」をテキストに3つの歌曲集を書いた。『六つの子供の歌』は、大正時代に生まれた芸術性高い詩「童謡」に、複雑な楽曲構成要素（調性、和声、リズム）、西洋の芸術歌曲から影響を受けたピアノリズムを付けるなど趣向をこらし、高い演奏技術を要する「芸術歌曲集」とした。一方、晩年の『ほしとたんぼぼ』では、金子みすゞの優しく心温まる詩「童謡」に共鳴し、童謡に通じる楽曲構成要素（分かりやすさ、単純さ）を多用し、子供も歌えるような親しみやすい作風の「童謡歌曲集」とした。『こどものための8つのうた』は、それらとはまた異なる視点で音楽を書いたと思われる。この歌曲集において中田は、詩「童謡」に描かれた、日本の子供の生き生きとした心情、生活、空想、ファンタジー＝「子供の世界」を、大人の視点で遠くから優しく眺め、その親密で不思議な世界を、日本的な音組織（五音音階）も取り入れながら、多様な響きで表現した。シューマンが「子供の情景」で、ドビュッシーが「子供の領分」で表現した大人のための「子供の世界」を、中田は歌曲集『こどものための8つのうた』において実現したと考えられる。

付記

本稿における楽曲分析において、横浜国立大学教授田鎖大志郎先生よりご助言を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

現した音楽であることを考察した。

(2004. 10. 27. 受稿)

注・参考文献

- (1) 「彼の音楽の持つ本質的な世界としての‘抒情’が、ここに三好作品と提携した」(畑中良輔「中田喜直とその作品(1)」、『日本歌曲全集30 中田喜直I』、音楽之友社、1993年)、3頁。
- (2) 「それまでの日本歌曲に聴くことの出来なかった新鮮なリズム、豊富な和声、独創に満ちた旋律」(畑中良輔、前掲『日本歌曲全集30』)、3頁。
- (3) 中田喜直「金子みすゞ、と私のこと」(矢崎節夫監修『金子みすゞの世界』(JULA 出版局、1997年)、80～83頁。
- (4) 同上。
- (5) 薩摩林淑子「中田喜直の童謡歌曲集『ほしたんぽぽ』におけるピアノパートの書法」、鎌倉女子大学紀要第10号、2003年、21～30頁。
- (6) 小泉文夫「日本伝統音楽の研究1」(音楽之友社、1958年)。
- (7) 『中田喜直歌曲集』(音楽之友社、1962年)、64頁(解説)。

使用楽譜

- ・『中田喜直歌曲集』(音楽之友社、1962年)。

要旨

本稿では、中田喜直の歌曲集『こどものための8つのうた』を題材に、詩「童謡」と音楽との関わり、ピアノパートの書法について楽曲分析を行い、その音楽的特質を探究した。その結果、詩「童謡」に描かれた子供の心情・視点の変化が、転調による音の響きの変化を用いて表現されていた。ピアノパートにおいては、①1曲内において多様な音組織を併用する書法、②日本的な音組織の使用、③後奏における響かせ方、の各詳細を明らかにした。以上より『8つのうた』は、子供の心情・生活を多彩な書法を用い幻想的な響きで表